

2018
おもろ
チャレンジ

ボルネオ島でカエルの種多様性創出の謎に迫る

農学部 4年

福山 伊吹

マレーシア

2018年11月17日-

2019年1月22日



渡航概要と内容

概要

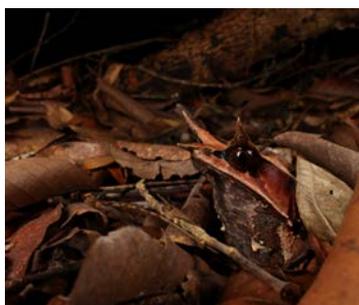
爬虫両生類の多様性調査のためにマレーシアのサラワク州を訪れた。10月上旬に出国予定だったが、サラワク政府からの調査許可がなかなか下りず、結局渡航できたのは11月下旬になり、当初の予定から日程をずらさざるを得なくなった。また、当初はサラワク州北西部のムル国立公園（以下ムル）に長期滞在する予定だったが、調査許可の関係上、難しくなり、急遽サラワク州北部ランビル国立公園（以下ランビル）にメインで滞在することにし、ムルへは1週間ほどの短期調査で訪れることにした。それに伴い、研究テーマも若干の変更をせざるを得なくなり、当初の予定のカエルの垂直分布・多様性調査から、もう少し内容を広げて爬虫両生類の多様性調査を行うことにした。以上のように出国前から、海外調査の難しさを痛感することとなった。

ランビルの長期滞在の合間に、12月11-18日にムルへ、12月28-1月9日にサラワク州西部のクバ国立公園及び付近のPenrissen山へ調査に訪れた。

成果としては、ランビルで確認した爬虫両生類のうち10種以上が国立公園初記録種であり、その中にはこれまでほとんど採集記録がなかったものや未記載種も含まれていた。また、ムルでの調査ではムル山の高地で固有のカエルが複数得られ、サラワク州西部での調査でも各地で固有種や未記載種が複数得られたりと、全体を通して見ても大変大きな成果が上がった。

得られたものは大きかったが、現地での交渉などでは苦労することも多かった。今回調査を行ったのは主に国立公園内で、もちろん事前に内諾は得ていたのだが、それでもうまくこちらの意図が伝わっていなかったことで、採集個体数や採集エリアに大幅な制限がかけられたり、夜間調査はできないと言われたりと実際に現地に行ってみると思ったようにいかないことが少なくなかった。そのような時は、サラワク政府からの調査許可を見せて、正式に許可を受けた研究者であることや、これまでも野外調査や夜間の調査の経験が多くあること、そもそも爬虫両生類は

夜間でないと効果的な調査ができないことを丁寧に説明し、多くのケースでなんとか理解を得られることができた。全体的に国立公園などでの調査等に関しては制限が厳しい印象を受けた。それは一つには訪れた場所のいくつかはエコツーリズムに力を入れており、観光客に見せるはずの生き物を採集してしまう研究者にはあまり良い印象を持たないためのものであった。確かにそれは最もなことではあるが、種多様性研究には標本がどうしても必要なこと、エコツーリズムもそういった基礎研究に支えられていることがあまり理解されていないようで残念であった。もう一つの理由は近年に無許可で標本を採集した研究者がいたためであったようで、身勝手な研究者がいることで真面目に許可を取って調査をしている研究者が大きな不利益を被ることに憤りを覚えた。



ミツヅノコノハガエル



ムルの雲霧林



アオマタハリヘビと (越智慎平撮影)

渡航を通じて感じたこと・学んだこと

今回は事前の現地とのやりとりや実際に現地に行ってから交渉など、これまで何度か参加させていただいた調査への同行では完全に同行者任せだったことを一人でやらざるを得なかったのも、大きな勉強になった。一方で、自分の語学力の無さにもどかしさを感じることも多く、やはり海外調査には英語や現地語の習得が不可欠であることがよくわかった。

今回は、1人で野外調査を行っていたことが多かったのも、その過程で色々考えることも多かった。それが自分の新しい研究のアイデアになったり、その時の状況の打開策を思いついたりすることも珍しくなかった。色々な人と議論することも非常に重要だが、一方で、一人で自由に考える時間も不可欠であると感じた。

また、熱帯雨林の中でカエルを見つけるのがかなり上達した。

今回の経験をどのように今後生かしていくか

今回訪れたのは、これまで事前に訪れたことがある場所が多かったのも、苦労したとはいえ交渉などもやりやすい方だったのだと思う。これから様々な場所で海外調査を行っていく中では、うまくいくことばかりではないと思うが、そのような時こそ今回の経験を生かしてどう対処していくかという底力が試されるのだと思う。また、今回の調査では未記載種の発見を始め、様々な新発見が得られたので、そういった成果はここから学術論文としてまとめていく予定であ

る。

■ 今後本プログラムを希望する学生へのアドバイス

本プログラムでは外部からの助成を受けることが難しいようなやや非現実的な研究であっても、独創的で挑戦的な内容であれば採択される可能性は高いと思う。自らにしかできないような「おもしろい研究」を考えて、海外で好きなように好きなことをやりたい人は是非とも応募すべきだと思う。

■ 主な奨学金の使途

*渡航費

*宿泊費

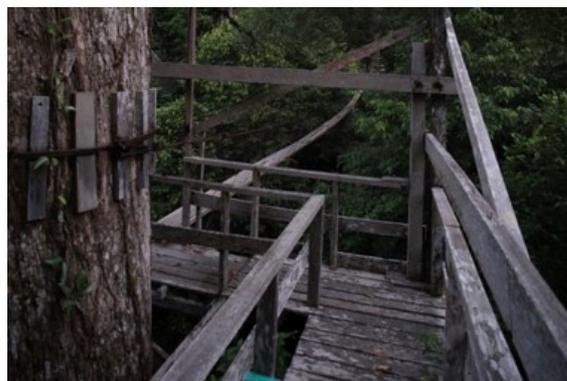
*ポーター代

*海外旅行保険

*その他（予防接種、現地交通費等） など



標本作成（採集した個体は標本として現地の研究機関に残した）
（越智慎平撮影）



ランビルで調査したツリータワーとキャノピーウォーク



ウデナガガエルの1種



クールトビヤモリ



ナガレガエル